どに掲示されることで市民の応援ムードの盛り上げに一役買っています。

「大谷翔平選手ふるさと応援団」構成団体の岩手ふるさと農業協同組合に掲示された大谷選手の新人王を祝う掲示（写真左）と市が作成したデザインを利用し、奥州商工会議所が作成した「投打猛進」のキャッチフレーズが入ったポスター（写真右）

投打猛進とは－

「今年の漢字」の揮毫（きごう）で知られる奥州大使の森清範（せいはん）清水寺貫主が大谷選手をイメージして考案、揮毫した言葉が「投打猛進」です。この言葉は、市が作成したポスターや横断幕に使用されているほか、許諾を受けた団体が作成したポスターにも使用されています。

トークイベント〝翔タイム〟－ いわて奥州からエール －

ふるさと応援団の設立により、さらに市内で盛り上がりを見せるようになった大谷選手への応援。その盛り上がりの一つの成果が「トークイベント〝翔タイム〟－ いわて奥州からエール －」です。

11月4日に市文化会館（Zホール）で市が主催したこのイベントは、ふるさと応援団と岩手日報社の共催により実現しました。長年、大谷選手の取材を続けるスポーツライター佐々木亨（とおる）氏を講師に迎えた講演と、大谷選手をよく知る人たちによるパネルディスカッションを行い、大谷選手にまつわる思い出を聞くことができる貴重な機会となりました。ここでは、その要旨をお伝えします。

長年、大谷選手の取材を続けるスポーツライター・佐々木亨氏による基調講演

ストレートトーク（基調講演）

『大谷翔平選手の生き方にふれて～岩手で育まれた思考力と感性～』

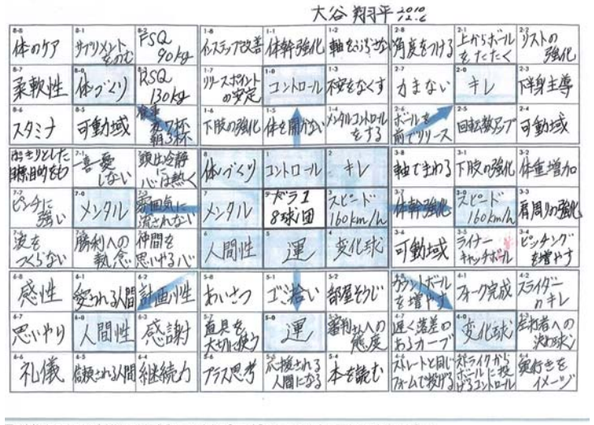
講師　スポーツライター・佐々木亨氏

この講演では、大谷選手を普段からの呼び方である「翔平君」と呼ばせていただく。翔平君が15歳のときから取材している。翔平君は生まれも育ちも岩手。岩手の大自然、人のつながりの温かさが今も心に残っているだろう。岩手でよかった。

大谷家は温かい雰囲気。両親は特別な子育てはしていないというが、勉強になるところがある。お父さんはほとんど怒らず見守る育児。お母さんは甘えん坊だった翔平君を受け入れる育児。このバランス、愛情ある見守りが、翔平君の成長に大切だった。

花巻東高校の佐々木洋監督との出会いは大きかった。佐々木監督の指導は言葉を大事にし、「個を最大限に生かす」もの。翔平君への指導も、成長期だから1年生の秋まで投手をさせないという個性に配慮した長期スパンのものだった。翔平君は佐々木監督から、自分の可能性を信じること、目標設定の大切さを学んだ。1年生の時の目標設定シートから、ドラフト1位指名、スピード160キロ、メンタル、人間性、運など、細かい目標の立て方が分かる。この年齢で運を意識できる人はなかなかいないと思う。

二刀流を全米に認知させた大活躍で、いろいろなものを見せてくれた1年目だった。



平が高校1年の時に自ら書き込んだ目標達成シート。中央の「ドラ1」「スピード160キロ」は、両方とも2年後に達成した

中学（一関シニア）時（写真提供：ふるさと応援団顧問　佐々木健一さん）

木製の投手陣、1秀なメンバーだった。彼らが高校生活たのが目標達成シ終目標を囲む8マ手段となる重要項は「コントロール160キロ」「変化球ンタル」「体づくり」いずれも投手を意が興味深い。甲子う言葉もない。あを向上させるため

重点項目の下に心掛けを書く。のは「人間性」をけだ。「愛される人「継続力」「信頼さ」いやり」「感性」が

「運」を導く心さんへの態度」やはやどういう関連い。「審判さん」、かどうかは別にンバーのあいさつ花巻市民の誇りでンビニやコインラ

高校１年生のときに自ら書き込んだ目標達成シート。「岩手日報社刊『大谷翔平 挑戦』」より

1旧水沢市小学校水泳記録会50メートルバタフライ入賞（写真提供：姉体町振興会）　2小学校卒業式（右、写真提供：同振興会）　3上姉体町内会新年交賀会（写真提供:立花公夫さん）　4大谷選手にまつわるエピソードが披露されたパネルディスカッション（左から佐々木亨氏、立花公夫氏、小菅智美氏、小田野純一氏）

シーズンを通して野球を楽しんでいたが、これが彼の本質ではないか。楽しむことが彼の行動力になっている。

翔平君をこれからも見続けていけることは幸せなこと。皆さんもできれば生で、楽しむ彼の姿を見てほしい。

クロストーク（パネルディスカッション）

基調講演に続いて行われたパネルディスカッションでは、講演講師の佐々木さん、ふるさと応援団顧問の立花公夫（きみお）さん、花巻東高校硬式野球部コンディショニングトレーナーの小菅智美（ともみ）さん、岩手日報特派員の小田野（おだの）純一さんがパネリストとなって、「二刀流 大谷翔平の秘密と記録」というテーマに沿って、大谷選手にまつわるエピソードを披露しました。

大谷選手の小学生時代を知る立花さんは、水泳大会の写真などを公開。「少年野球大会では長打を連発し、守備ではサードで出場していて、ピッチャーでは投球を受けられる子がいなかった」と、当時から力が飛び抜けていたと話しました。

花巻東高校の指導者陣は入学時から大谷選手のプロ入りを意識していたと語った小菅さん。大谷選手の投球の秘密は体の柔らかさでなく体のしなりによると解説したほか、大谷選手の末っ子らしい立ち回りのうまさや身体能力の高さを示すエピソードなどを披露しました。

すごく真面目だが、人気・注目度が高くて記者泣かせと大谷選手を評した小田野さんは、いたずらっ子な一面を紹介。チームをプレーだけでなく、ムードの点でも盛り上げていたと話しました。

話題が11月12日（日本時間、11月13日）の新人王に触れると、佐々木さんは「取れる」と断言。会場からは大きな拍手が湧き上がりました。最後には、各パネリストから大谷選手に向けた激励の言葉が送られたほか、来場者全員による記念撮影が行われ、成功裏にイベントを終えることができました。

10月26日から９日間、１年間の活躍を伝える「岩手日報『大谷翔平』報道パネル展」も開催された。（コープアテルイ）

届けよう ふるさと 奥州の思い

大谷選手の活躍は、野球ファンの垣根を越えて市民に元気をもたらし、市の活性化につながっています。市の大谷選手を応援する取り組みは、選手個人の応援という内容に留まるものでなく、市の未来を担う若者が第二、第三の大谷選手を目指したいというような意欲を喚起することを願うものです。

この取り組みが、地域や団体などに応援の輪として広がり、ふるさと奥州からの応援の声が大谷選手に届くよう、市民の皆さんの後押しをお願いします。